

英語の国際化と多様化

本名信行
青山学院大学

1. 英語の現在

英語は現在、他の言語にない非常に独特の特徴をもっています。まず、英語は世界の多くの国々の公用語や通用語になっています。世界 193 ヶ国のうち、英語を実質的に公用語にしているところは 50 ヶ国になります。この中には英語を準公用語や第 2 公用語としているところも含まれます。

また、英語を通用語とする国は 20 ヶ国です。すなわち、英語は 70 ヶ国で大きな役割を果たしているのです。さらに、その他の国々で、英語を「外国語」あるいは「国際言語」として学習している人は膨大な数になります。そして、そのために、英語は多様な民族と地域の文化を反映します。

このことはアジアでも同様で、英語はアジアの言語であるともいえるでしょう。英語はアジア各地の街角、商店、学校、官庁、そして職場で、頻繁に使われています。アジアには中国(13 億)、アセアン(5 億)、そしてインド(10 億)という巨大な地政学的ブロックが存在し、英語はさまざまな地域言語と役割を分担しながら、きわめて重要な国内・国際言語となっています。

これを日本人の立場からいうと、英語は英米人とだけ話すことばではなく、ドイツ人ともイタリア人とも、中国人とも韓国人とも、アラブ人ともトルコ人とも、アフリカの人とも南米の人とも交流するのに有効なことばなのです。つまり、英語が国際言語になったということは、英語が多国間、多文化間コミュニケーションの道具になったということなのです。私たちはとりわけ、英語をアジアの中で使うことが当たり前になっています。

2. 英語は多文化言語

ただし、そうはいつても、世界中の人々がどこでも、まったく同じ英語を話しているわけではありません。せっかちな人は英語が国際言語になったと聞くと、アメリカやイギリスの英語がそのまま世界中に広まった、だから自分もバスに乗り遅れてはならないと感じるかもしれません。しかし、現実はそうではないのです。

英語は実に多様な言語なのです。英語を母語とするアメリカ人、イギリス人、カナダ人、オーストラリア人がみなそれぞれ独特の英語を話しているように、英語を母語としないアジアの人、アフリカの人、ヨーロッパの人南米の人もいろいろと特徴のある英語を使っています。ヨーロッパでは、お国なまりの英語が尊重されています。

だから、アジアの英語をアジア諸英語 (Asian Englishes) と呼んでも、おかしいことはありません。すなわち、インド人はインド人らしい「インド英語」、シンガポール人はシ

ンガポール人らしい「シンガポール英語」、フィリピン人はフィリピン人らしい「フィリピン英語」を話しているのです。もちろん、中国人、タイ人、インドネシア人、ベトナム人、そして日本人の英語にも、それぞれ独特の構造的、語用的特徴が見られます。

3. 普及と変容

このことは普及と変容の関係を考えれば、よくわかるでしょう。ものごとが普及するためには、適応が求められる場合が多いのです。例えば、マクドナルドがインドに進出したいします。インドはヒンズー教徒が多いので、牛は神聖な動物であり、牛肉を食することはタブーとなっています。

しかし、ボンベイ（現ムンバイ）のマクドナルド店はインド人の人気スポットとなっています。どうしてでしょうか。そこにはビーフの代わりに、マトンやチキンのハンバーガーを出しているからです。マクドナルドがビーフに固執すれば、インドに出店できなくなります。逆に、マトンやチキンでも立派なハンバーガーになるのです。

ことばもこれと似ており、英語が世界に広まれば、世界に多様な英語が発生することになります。だから、英語の国際化は、必然的に英語の多様化を意味するのです。多様化は国際化の代償ともいえるでしょう。この意味で、英語の今日的問題は多様性抜きには考えられません。私たちは英語のさまざまな変種に興味をもつべきなのです。

むしろ、英語は多様であるからこそ、共通語になれるということもできます。従来、共通語には「画一、一様」というイメージがつきまとっていました。しかし、よく考えてみると、多様な言語でなければ、共通語の機能ははたせないのです。だから、アメリカ英語の発音、語彙、文法、表現が世界共通英語として強制されれば、英語は広範囲に普及することはないでしょう。英語内のいろいろな差違が受容され、尊重されてはじめて、英語は国際共通語になれるわけです。

4. 英語の脱英米化

このように、英語がネイティブ・スピーカーの枠を越えて、ノンネイティブ・スピーカーをもふくむ多くの人々の異文化間コミュニケーションの手段になったということは、英語を英米文化から切り離して運用することが可能になったことを示しています。これは英語に新しい国際的な役割を与えることになります。

例えば、第3世界の人々は最初は英語を使うと旧宗主国の文化を引き継ぐことになり、独自の国民性を育成できないのではないかと危惧していました。しかし、彼らは自国の状況に合った独自の英語パターンを創造することによって、この問題を解決できることに気づいたのです。それは、基本的には、土着の言語と文化の影響を受けた英語になるでしょう。

例えば、フィリピンでは、ピリピノ語とともに英語を公用語としています。そのフィリピン英語はフィリピン文化を直接的に反映します。フィリピン人は相手をできるだけ立て

ようとします。乞食が寄ってきて、乱暴な言い方はしません。”Forgive me, sir.”と言って、丁重に断ります。相手を傷つけまいとして、ていねいな言い方をします。

ときにはそれがあいまいな表現になることもあります。フィリピン人の Yes は、なかなか意味深長です。文字通りの意味に加えて、(1)Maybe. (2)I don't know. (3)If you say so. (4)I hope I have said it unenthusiastically enough for you to understand I mean no. などの意味をもっています。No. とは簡単に言えないのです。

日本人がフィリピン人の知り合いに、”Can you pick me up at eight here?”と言い、相手は”I'll try.”と答えたのでずっと待っていたが、ついに来なかったという話があります。フィリピン英語では I'll try は I don't think I can. の意味なのです。もちろん、こういったことは最初は不便でも、慣れればそれほど苦になりません。

このような言い方を劣等視するのは、まちがいでしょう。一般に、英語を母語としない人々は英米の文化を学習するために、そしてネイティブ・スピーカーと同じように話すために英語を勉強しているわけではないのです。むしろ、自分が属している民族、文化を意識し、自分を国際的な場面で表現する道具として、英語を使っているのです。

すなわち、英語を学習するからといって、アメリカ人やイギリス人の行動規範に同化することにはならないのです。英語は英米文化を模倣する手段ではなく、世界の人々を相手に、自分の思うこと、感じることを、すなわち自分のアイデンティティを表現する道具なのです。

本講では、これらの問題を体系的に議論して、英語を国際言語と認識し、そのように学習する論理を考えます。

参考文献

鈴木孝夫『武器としてのことば』新潮社、1985。

本名信行『世界の英語を歩く』集英社、2003。